



ひまわり通信

No.00706. 2025.2.27(木)

健康寿命から貢献寿命へ

天然物「微細藻類」には無限の可能性がある！！

●クロレラ並びに微細藻類の研究小史

日本は飽食の時代といわれるが、これはとんでもない傲慢だ。明らかに誤解である。日本は年間2000万トンの食糧を輸入して、1000万トンをごみとして捨てている。その反面、アフリカの一部では半永久的な餓死状態が続く。内戦による難民の食糧危機とコレラなどの流行病は、毎日のように新聞やテレビで報道されている。飽食などとはざいている日本は、食糧自給ができず、大半を外国からの輸入にたよっているのが現実だ。

世界は常に食糧危機の状況下にある。平成5年のコメの凶作は、日本国内をコメ狂奏曲で奔走させた。政府は慌ててアメリカやタイからコメの緊急輸入をやり、闇コメ屋が横行し、コメの値段はうなぎ昇りに上がった。主婦はおコメ屋さんを駆け回り、食療法が問題となったわけだが、このように日本国内でも、食糧危機に面している現状から、目をそらすべきではない。

世界の食糧危機を危惧して、いち早くクロレラの研究に着目したのが、日健総本社の筆頭顧問である岩本浩明博士だった。

岩本博士は、昭和25年、東京帝国大学農学部農芸化学科の微生物利用科学研究（当時農学部助手）においてクロレラの研究に着手した。

翌年、光合成の権威・田宮博教授を中心としたプロジェクトチームが生まれ、米国、イスラエル、旧西ドイツなども並行して研究が進められた。日本が敗戦の混乱と食糧難であえいでいたとき、真摯な科学者たちは、寝食を忘れてクロレラ並びに微細藻類の研究に打ち込んでいたのだ。

その研究成果はめざましく、昭和32年には科学技術庁の肝入りで、東京都国立市にクロレラ研究所が建設された。そして岩本博士を長とする数人の若手研究者によって、世界で初めての大規模な戸外培養研究が進められた。

これらの専門の科学者たちとは別に、民間企業家にクロレラ信奉者がいた。永松昇がその筆頭であろう。そして当時、クロレラ研究所の所長としてその経営に尽瘁した、国策パルプ副所長の南喜一並びに医学博士・武知芳郎がそれに次ぐ。

田中は、その当時から永松の片腕として働いていた。岩本博士は、南喜一のクロレラに次ぐ情熱と意気を感じて、一身を投じてクロレラ研究の研究管理にあたった。やがて田中は専門家の話を傾聴し、クロレラその他の多糖体の成分を有効に取り入れた健康食品の開発＝永松の「百年構想」実現に奔走した——こうして昭和50年「クロスタニン」が誕生したのである。

※田中とは、日健総本社創業社長であり「クロスタニン」の生みの親である田中美穂のことである。

田中美穂の「生きる法則」鶴時靖夫 著 1994.10.13初版発行

イスラエルの赤い宝石「ドナリエラ」愛の一粒運動実施中！！

(株)日健総本社 兵庫特約店

(有)クロスタニンひまわり

☎ 0120-42-8198